

「たびとしよCafe」



Guest speaker

山寄一也氏（山寄一也建築設計事務所代表・女子美術大学非常勤講師）

1974年東京都出身。芝浦工業大学大学院建設工学修士課程修了。
2001年単身渡英。観光ビザで500社以上の就活をし、ロンドンに建築設計活動を開始。
2003～2012年に勤務したアライズ・アンド・モリソン・アーキテクトでは、欧州最大級となるハブ駅、キングスクロス・セントパンクラス地下鉄駅改修工事の現場監理やロンドン五輪の招致マスタープラン模型、レガシーマスタープラン、グリニッジ公園馬術競技場の現場監理に関わる。
2013年1月帰国。東京を拠点に事務所設立。
著書『イギリス人の、割り切ったシンフルな働き方』（カドカワ、2016年）
『そのまま使える 建築英語表現』（学芸出版社、2016年）。
首都大学東京大学院観光学域博士後期課程在籍。

「観光都市ロンドン はオリンピックピック・ パラリンピックを どう捉えたか」 建築空間・公共空間・景観を 観光レガシーへ

2018年8月28日（火）、第14回
たびとしよCafe「観光都市ロンドン
はオリンピックピック・パラリンピックを
どう捉えたか―建築空間・公共空間・

景観を観光レガシーへ」を開催しま
した。ゲストスピーカーとして、ロン
ドンオリンピックにおいてレガシーマ
スタープランや競技場の現場監理など

に携わった、建築家の山寄一也氏をお
迎えました。
2020年東京オリンピック・パラ
リンピック開催まであとわずか。近年

ではオリンピック政策の重要な取り組
みの一つとして観光を位置づける国も
多く、ロンドンオリンピックのように
ユニークで戦略的な観光政策を展開し

た例も注目を集めています。日本でもレガシープランが策定され、観光面でも様々な取り組みが行われていますが、「観光レガシー」のあり方と、それを次世代に引き継ぐためにはどういったことを意識し、実践するべきでしょうか。ロンドンの事例を紹介いただきながら、オリンピックを契機として、東京の建築空間・公共空間・景観をどう魅力的なものにしていくかについて考えました。

【第一部】 山寄氏からの 話題提供(ポイント)

●オリンピックが終了した後のメインパークを中心とした地区の未来を描くのがロンドン大会でのレガシー計画である。つまり、次世代へのたすきである。今いる人だけが儲けることを考えるのではなく、次世代に何を遺すかを考えることがレガシー計画には重要である。オリンピックを契機にした再開発で、地価が安く治安も悪いロンドン市内東部地区の環境を改善させた。一方で市内中心部に設置された競技会場はオリンピックが終われば撤去す

る前提のもと、例えばビーチバレーボール会場などは1・5ヶ月で作り上げるといふ簡素な造りだった。「遺さないレガシー」という考え方もあった。

●ロンドン大会ではスタジアムや競技場を独立したものとして考えるのではなく、街や都市そのものが競技場であるという考え方があった。例えば馬術競技は世界遺産であるグリニッジ公園を会場としたが、観客席は鉄パイプで組んだ骨組みに布をかけるような簡単な作りであった。しかし、クロスカン トリーコースで競技馬が障害物を跳び越えているその後ろ姿は、テムズ川対岸の新金融街の高層ビルを跳んでいるように世界中の人々が注目するテレビ画面には映ったはずだ。どのような競技場をつくるかというよりも、街をどう見せるかを常に意識して競技場配置やカメラレイアウトを考えていた。

●1964年の東京オリンピックのテーマは戦後復興で、それに合わせて新幹線や高速道路などのインフラが整備された。いわばオリンピックを持ち込むことで都市を作り上げたと言える。しかし、現在の東京という都市はある程度できあがっている。成長社会と成

熟社会の違いを見据え、オリンピックを目的ではなく手段としてどう使うかを考えるべきである。

●開会式を行ったメインスタジアムも簡素な造りであったが、市民ボランティアによるパフォーマンスのレベルの高さを見て、洗練された場所になったことを感じた。そして何より自国イギリス選手が金メダルを獲得するなど、スタジアムはオリンピックが始まる前に完成するのではなく、オリンピックが成功してはじめて完成することを感じた。

●聖火リレーが街中を通る時には警察



写真1) オリンピック期間中のロンドン タワーブリッジ
※山寄氏提供



写真2) グリニッジ公園馬術競技場 ※山寄氏提供

官が観衆を盛り上げるように煽り、ハ イタッチしていた。日本では考えられない光景であったが、ロンドンでは警察官が街中を歩き回っているのが日常風景であり、市民との距離感がとても近いということが背景にある。

●ロンドンオリンピックのスローガンは「Inspire a generation.」であり、それを私は「次世代へのたすき」と意訳すべきだと考える。それを体現するように開会式のクライマックスである世界中が注目する最終聖火ランナーに往年のアスリートなど著名人ではなく、まだ無名の10代選手たちを起用した。

また聖火が灯された聖火台の一部となる小さな花弁は参加国の数と同じ204枚あり、オリンピック終了後に「おみやげ」として各国に渡された。このように人に語りたくなるような演出があちこちで行われたことも特徴ではないか。

●ロンドンオリンピックを通してイギリスが世界に伝えたかったのは、世界中の人にイギリスを好きになってほしいということであった。そのために彼らはイギリスとは何かを突き詰めて考え、イギリスのシンボルや文化、アイデンティティを前面に出す仕掛けを施した。日本も2020年に向けて、世界の中での日本とは何か、日本の観光の特徴とは何かを再考すべきかもしれない。

【第2部】 意見交換

参加者：観客や選手などの輸送手段についてはどのような計画が立てられていたのか。

山崎氏：ロンドンには地下鉄やバスが充実していてコンパクトな街である。徒歩での移動もしやすいため、期間中は



歩いて移動することを推奨するマップも配布されていた。一方で競技会場によつてはアクセスが良すぎると最寄駅に人が集中し過ぎてしまうため、最寄駅を閉鎖して周辺の別の駅を利用者を分散させる措置をとったグリニッジ馬術会場の例もあった。またターミナル駅は一方通行にしていた。不便な面もあったが、移動に余裕を持ってもらうためのキャンペーンを大会前から行っていた。普段利用している市民にスムーズに移動してもらうためのコントロールをすることであまり良かったのではないか。

参加者：ロンドンに行った時に街なかに新旧が同居しているのが素晴らしいと感じたが、ロンドンの方たちが街を再開発する時の美意識とはどういったものか。

山崎氏：「テート・モダン」のように使われていた発電所が現代美術館に転用された例もあるが、ストーリーがあると残しやすい。イギリスは芸術や文化に対する意識が高いということもあるが、その建物の背景にある歴史をふまえてリノベーションすることが得意である。

参加者：ロンドンオリンピックでは文化プログラムがカルチュラル・オリンピアードとして4年間実施されていたが、市民の立場としては文化プログラムをどう見ていたか。

山崎氏：オリンピックが近づいてきた時にプログラムを見たが、ロンドンのシンボルとなる市庁舎を背景にダンスーがパフォーマンスをされていてとても興味深かった。日本でも日本人が知らないところには外国人観光客がこぞって訪れていたりと、アニメやメイドカフェなど海外で高く評価されている文化もある。意外と足元にあるものを知らないことが多いので、そういったものを

捉えなおすべきではないか。大切なのはプログラムの数を多くすれば良いという短絡的な考え方ではない。

参加者：東京オリンピックの進め方についてはどう思われるか。

山崎氏：例えば、東京オリンピックの最初のエンブレムのデザインが発表された時に賛否両論があつたが、イギリスでも同様の反応があつた。しかし、ロンドン大会組織委員会は反対意見を受け付けずにそのデザインで押し通した。世界の注目を集める五輪エンブレムのデザインというのは賛否両論があるくらいの強い個性がないと印象に残らないことを証明したと思う。もちろん、公募における不透明な選考プロセスはあつてはならないが、日本でもデザイナーの専門家に対するリスペクトはもう少し必要であると感じる。組織委員会はクライアントとして、また、パトロンとしてデザイナーや建築家を理解し、守り、一度決めたことは突き進める強い意志や覚悟が必要だと思う。

参加者：ロンドンではパラリンピックも評価されたと思うが、印象に残っている点はあるか。

山崎氏：パラリンピックは規模が小さくなるため、元の会場を縮小する形で

対応した。しかし、仮設の会場も多かったため、バリアフリー対応については不十分なところも多かったように思う。ロンドンの街なかではバリアフリー対応はオリンピック以前から意識されている。スイッチひとつで乗り降りできるスロープが自動で出てくる2階建てバスのように、わざわざ誰かに助けてもらわなくても障がいのある人が一人で行動できるような環境が整っている。ハード面での対応と同時に人々の意識が変われば街は変わっていくのではないか。

参加者：ロンドンには都市の総合力ランキングでも上位であり、観光地としても人気があるが、一過性ではなく、オリンピック後も人気が続いている理由はどこにあるのか。

山崎氏：ロンドンは建築や都市景観そのものが魅力的であり、かつ美術館、博物館、劇場など文化施設が充実している。そこに今回のオリンピック開催のレガシーとして競技会場などが加わり、見どころが多く何度も訪れたい街となった。また、留学生の受け入れに力を入れている点もユニークだと感じる。若い留学生がロンドンを中心としたイギリスでの経験を帰国後に語

ることで、ロンドンの魅力が世界中に発信されることになる。

おわりに

参加者の皆様からは、「2020年の東京オリンピックだけではなく色々なプロジェクトに応用できそうでした。何より物事の考え方を直すきっかけになりました」「2020年に向けた今をとらえる機会として勉強になった」といったご意見をいただきました。レガシーマスタープランや会場設計など、現場に携われたからこそ得られた山崎氏の知見は興味深く、イギリスの戦略的で割り切った考え方、どのように「次世代にたすきを渡すか」というレガシーの考え方、自国のアイデンティティへの認識とその見せ方は、今後の大規模イベントとの向き合い方や、世界に向けて日本をどのように見せていくかを考える上でも参考になりました。

(観光文化情報センター 旅の図書館長
企画室長 主任研究員 福永香織)



〈参考〉 Delivering a Golden Legacy A growth strategy for inbound tourism to Britain from 2012 to 2020
https://www.visitbritain.org/sites/default/files/vbcorporate/Documents-Library/documents/Britain_Growth_%20Strategy%20Inbound_Golden_Legacy_2012_to_2020.pdf